

第 6 回 ロマン派音楽レクチャー・コンサート

ショパン、リスト、タールベルク 超絶技の室内楽

2014年 10月4日(土) 五反田文化センター 音楽ホール

14:00 開演 13:15 ロビー開場 13:30 開場

主催：「若きダーヴィト同盟」

ご挨拶

本日はようこそ、ロマン派音楽レクチャー・コンサートにお運びくださいました。

19世紀前半、ヨーロッパは新しい市民社会の体制を秩序づけるべく進んでいきますが、文化の面では確たる内実への不安を抱く不透明な時代でもありました。

ドイツ・ロマン派の音楽家 R.シューマン (1810-56) が「ダーヴィト同盟」を結成し、“若い詩的な未来”への闘いを表明したのはそうした時期でした。彼は機関誌『ライプツィヒ音楽新報』(翌年から『音楽新報』)を創刊し、評論と作曲を両輪として、古典の精神に汲みながら、大胆で新しい音楽を発信していきます。その希望を私たちは音楽から感じたいと思います。この時代の音楽の響きを若い演奏家たちの精神を通してお届けできますと幸いです。

藤本 一子 (音楽学)

Program

フレデリク・ショパン *Frédéric Chopin (1810-49)*

フランシヨーム *Auguste-Joseph Franchomme 協力*

マイアベアー《悪魔のロベール》の主題に基づく協奏的大二重奏曲

Grand duo concertant sur des thèmes de Robert le diable.

森山涼介 (Vc) 佐々木崇 (Pf)

ジギスムント・タールベルク *Sigismund Thalberg (1812-71)*

ピアノ三重奏曲 イ長調 Op.69

第1楽章 アレグロ・モデラート

第2楽章 アンダンテ・カンタービレ

第3楽章 アレグレット・マ・ノン・トロツポ

奈良希愛 (Pf) 山本美樹子 (Vn) 森山涼介 (Vc)

--- 休憩 10分 ---

フランツ・リスト *Franz Liszt (1811-86)*

三人のジプシー[ロマ] *Die drei Zigeuner. S.383*

ハンガリー狂詩曲第12番 *Rhapsodie Hongroise. XII S.379a*

依田真宣 (Vn) 佐々木崇 (Pf)

忘れられたロマンス *Romance oubliée. S.132bis*

森山涼介 (Vc) 奈良希愛 (Pf)

超絶技巧——音楽の新しい地平をもとめて

19世紀前半は科学が進展する時代でした。その波は音楽にも押し寄せます。鍵盤楽器を中心に、そして管楽器においても楽器の機構があらたに開発されていきます。これと並行するかのように、演奏技術への関心が高まり、人々はそれまで聴き慣れていた音楽と違った音響世界に魅了されていきました。それまでのありきたりの世界を打破するエネルギーをもつ意味で、これもロマン主義の運動の一面といえます。

主役は“至高 *virtus*”を語源とする“ヴィルトゥオーソ”音楽家たちでした。代表格は、ヴァイオリンのニコロ・パガニーニ（1782-1840）です。その演奏は、1820年代末頃からヨーロッパ音楽界に衝撃を与え、1830年以降には技巧を前面に出す音楽が数多く現れてきました。オペラの旋律をパラフレーズする超絶技巧曲が人気をよび、かつては二次的な創作であるとみられていた“書きかえ”や編曲が市民権を獲得し、この種の作品が多く世に出されます。完全な技巧/技術への志向は、指の訓練機「ダクティリオン *Dactylion*」（1836年）や指拡張機（1840年頃）も生み出しました。

R.シューマンが「ダーヴィト同盟」を結成して闘った相手は、こうした風潮のなかで生まれた“魂のない技巧音楽”でした。しかし、優れたヴィルトゥオーソたちの音楽は、技巧的な音楽の次元をたかめ、音楽の聴き方それ自体を変革して、19世紀に新しい地平をひらいていったのでした。

●フレデリック・ショパン（1810-49）

ワルシャワ近郊ジェラゾヴァ・ヴォラで生まれたショパンは、ワルシャワ音楽院で教育を受けたのち、ドイツ、ウィーンそしてパリへと活動の場を求めます。1829年にワルシャワで、パガニーニのヴァイオリンとフンメルピアノに触れたことは大きい体験でした。「諸君帽子をとりたまえ！天才だ」（『総合音楽新聞』）と評された《くともに手を取り》による変奏曲 Op.2は、パガニーニ体験以前の作品ですが、華麗な技巧的な変奏が聴衆の熱狂をさそったといわれます。ショパンは健康上の理由から、ヴィルトゥオーソとして各地を旅することはありませんでした。サロンでの活動を通して、リスト、ターレベルクとともに「ピアノの三巨匠」とうたわれるようになります。

《〈悪魔ロベール〉の主題による協奏的大二重奏曲》はショパン 22歳の作品。1831年パリに到着してまもない頃、初演直後から人気だったマイアーベアのオペラ《悪魔ロベール》の旋律を用いてチェロ作品を書くよう出版社から依頼を受けたもので、チェロ奏者フランショーム（1808-84）の協力によって翌年完成しました。フランショームは弓奏法を進展させ、チェロという楽器に豊かな表現をもたらした人物で、ショパンのチェロ作品に欠かせない存在となります。

《協奏的大二重奏曲》は、オペラの旋律をとりこみながらも、随所にショパン独自の繊細な和声と抒情的なきらめきを感じさせます。この作品が出版されたとき、“ほかの技巧的な作品と異なって優美さと品格があり”“彼の指はファンタスティックで、その音楽は自由に心に届いてくる”“フランショームの助言があったにせよ全体はショパンが統括したもの”と賞賛されました（『音楽新報』1836.6.7. シューマン）。

音楽はホ長調。ピアノによる即興的な序奏ののち、チェロが静かに優しい旋律を歌い出します（第1幕ロマンスの主題）。この美しい部分が一段落を迎えると活気のある主部がひらけ、ピアノとチェロの装飾的な音型が高度な技巧を披露（第1幕 騎士の合唱の旋律）。やがてアンダンテ・カンタービレに転じて全体が豊かな響きに満たされつつクライマックスに向かいます（終幕 三重唱の旋律）。洗練された洒落な味わいはショパンならではと思わせられます。



●ジギスムント・タールベルク（1812-71）

19世紀において、タールベルクほど世界的に名声を得た音楽家はいないでしょう。スイスのジュネーヴ近郊で生まれ、10歳からウィーンでフンメル、モシェレスなど一流音楽家に師事して14歳でコンサートデビュー。早くからリスト最大のライヴァルといわれました。しかしリストが音楽誌上でタールベルクの音楽を「無能力と単調さの混合」と批判したことで、支持者たちを巻き込んだ大論争が1837年に起こります。二人はベルジョイオーソ公爵夫人主催の慈善演奏会で競演しますが（6人の作曲家による合作《ヘクサメロン》を演奏）、優劣の判定には至りませんでした。タールベルクの活動は新大陸にもおよび、1856年から2年足らずのアメリカ滞在では、約350回もの演奏会を催して絶大な人気を博しました。

“三つの手を持つヴィルトゥオーソ”といわれたタールベルクは、正確な技巧のみならず、タッチの柔らかさや気品のある音色によっても、聴衆をひきつけました。“一音のミスタッチもなく技巧は完璧。速く走るフレーズはまるで真珠の連りのようだ。ことにオクターヴが美しく、リストを除いて最高の演奏家”（クララ=ヴィーク）と賞賛され、彼と直接何度も会ったシューマンは“芸術とマナーにおいてウィーンで会ったうちで最高の輝かしい演奏家”とその人となりを讃えています。

《ピアノ三重奏曲》イ長調 Op.69 作曲：1853年

タールベルクの室内楽は、その数が少なく、ヴィルトゥオーソとしての演奏活動の影に置かれたことなどから、ほとんど注目されてきませんでした。しかしコンサート・プログラムをみると室内楽も組み入れていたようです。タールベルクの作品様式は、全般的に、古典的な品格と自由な感性が同居していますが、本日の《ピアノ三重奏曲》にもその特徴がみられます。ゆるやかな形式、優美な主題旋律と流麗なフレーズ、そして繊細な和声の響きは、実践的な感覚を想像させます。そのびやかさに共鳴するとき、タールベルクの音楽の魅力に触れることになるでしょう。

第1楽章：アレグロ・モデラート、イ長調。二つの主題が軸となる古典的なソナタ形式。付点音符付きの優美な主題と技巧的な走句が、古典の枠にとらわれないゆるやかな波をつくり、最後は長いコーダのあと、そのまま第2楽章に入ります。

第2楽章：アンダンテ・カンタービレ、ホ長調。第1楽章の主題が静かな聖歌のように姿を変え、ここから変奏がおりなされます。ここでは弦が前面に出て、ピアノパートは“真珠が連なるような”音型で背景をつくるのですが、しかしなんと高度な技巧が要求されることでしょう。ロマン派の室内楽で最も美しい楽章のひとつにあげられることもあります。

第3楽章：アレグレット・マ・ノン・トロツポ、イ短調～イ長調。適度な軽快感のなか、チェロのピチカートが謎めいた雰囲気をもたらし、洒落た楽章。古典的なABAの三部形式を踏まえながら柔軟に書かれています。基本の楽句が調をスライドして進展する着想は印象的です。一転して中間部（ヘ長調）は優美な旋律が流れ、ピアノの超絶技巧音型も美しくひた走ります。やがて主部（イ短調）が戻り、楽章が閉じられるかと思わせて、再び中間部を拡大した結尾楽句があらわれ（イ長調）、愛らしい身振りで閉じます。

●フランツ・リスト（1811-1886）

ハンガリーのドボルヤーン（現オーストリアのライディンク）で生まれたリストは、ウィーンでチェルニーに師事し、1832年にはパガニーニを聴いて“高度な演奏技術がもたらす表現の可能性”を学びます（福田弥『リスト』）。ピアニスト＝作曲家として大成功をおさめたのち、世紀中葉には13曲の交響詩を発表。新しい詩的ドラマ表現の方向を打ち出す一方で、ロマン的な宗教音楽を提示し、重要な作品の指揮も行う。リストは、いわば19世紀全体に翼をひろげた大鷲のような音楽家でした。

リストの室内楽作品には、弦楽四重奏の編成2曲、ピアノ三重奏の編成3曲、弦と鍵盤楽器の二重奏23曲などが残されていますが、リスト自身がこれらを人前で演奏することがほとんどなかったためか、いくつかを除いて、あまり知られてきませんでした。

さらに、ほとんどが、ほかの作品の書き直しであるため、オリジナル作品として評価されてこなかったという、作品美学の問題も横たわっています。しかしリストの場合、「書き直し/編曲」の手法、さらにそのセンスは比類ないもので、近年ようやく創作の重要な一面として光があてられるようになりました（参考文献参照）。ただし室内楽作品に関しては、まだ研究がなされておらず、看過される傾向があります。今後、多くの機会に演奏され、まずはその音楽を私たちが体験することが求められていると、感じます。

本日は4曲が演奏されます。いずれも世紀後半に書かれたもの。リスト自身の歌曲やピアノ曲に基づいていますが、単なる編曲をこえて独創的な作品に仕上げられています。ピアノと弦楽器の成熟した書法が聴きどころでしょう。これらは独立した器楽作品ではありませんが、原曲の内容を勘案するなら、そこからは、地上の世界を楽しみ、笑い、達観し、かつ思索する、リスト特有の精神世界がうかがわれるようです。

・《三人のジブシー[ロマ]》ニ短調 S.383 1864年

原曲はロマン派の詩人レーナウ Nikolaus Lenau(1802-50)のバラード詩に基づくリスト自身の歌曲で、詩は洗練された筆致で現実世界を静かに笑うもの（訳詩を参照）。リストはハンガリー生まれのヴァイオリン奏者レメニーのために、そしておそらく彼の協力をえて、見事なヴァイオリン曲を書きあげました。詩の世界が踏まえられながら、まさに超絶といつてよい技巧の音型が効果的に織り込まれ、詩性と技巧が融合した音楽が実現しています。

曲は冒頭、即興的な序奏が聴き手を三人のジプシー[ロマ]のいる情景へといざないます。速い音楽が始まると、それは最初の一人が弦を奏でているところ。次にアルペジオの伴奏で、ゆったりハンガリー風の旋律が歌われるのは、二人目がパイプをくゆらしているのでしょうか。そしてピアノシモでトレモロが響くと三人目は夢のなか—。やがて軽快なリズムとともに三人の自由な世界が楽しく打ち鳴らされ、最後は人生をみつめる詩人の独白で閉じられます。

・《ハンガリー狂詩曲第 12 番》嬰ハ短調 S.379a 作曲：1850 年代

原曲はリストの名声を高めたピアノ曲《ハンガリー狂詩曲 12 番》。本日のヴァイオリン曲は、19 世紀後半に名ヴァイオリニストとして名を馳せたヨーゼフ・ヨアヒムの協力により、最終的にはリストが仕上げました。冒頭、ヴァイオリンが即興的に登場。ヴァイオリンの技巧的な音型がハンガリー風の深いメランコリーをかきたてるようです。主題旋律が奏されたあと、いくつもの場面転換が絶妙です。あるときはハンガリー風の情熱的な旋律が歌われ、あるときは民族舞踊を思わせる情景があらわれ、さまざまな情景が入れ替わりながらクライマックスへと熱が加えられていきます。

・《忘れられたロマンス》ホ短調 S132bis 作曲：1880 年

チェロの憂愁にみちた《忘れられたロマンス》はリスト室内楽の名曲のひとつ。1843 年に作曲されたリストの歌曲《女の涙 *Le Pleurs des femmes*》をもとに書かれたピアノ曲《ロマンス》(1848 年)に基づき、ほぼ 30 年を経て弦楽器(ヴィオラ/ヴァイオリン/チェロ)とピアノのためのヴァージョンが作曲されました。晩年のリスト作品は音符が極力そぎおとされていますが、この作品も少ない音によって深遠な世界がひろがります。

・《オーベルマンの谷：トリスティア(哀しみ)》ホ短調 S.723 作曲：1880 年頃

原曲は、リストのピアノ曲《巡礼の年》第 1 年第 6 曲〈オーベルマンの谷〉(1836 年頃) S160/6 です。このピアノ曲は、リストが人妻であるマリーダグー伯爵夫人とスイスに滞在したとき、フランスの文学者セナンクールの『オーベルマン』に刺激をうけて作曲されたものです。青年オーベルマンの自己探求の苦悩が、リストの音楽にも映し出されています。

この楽曲を、1870 年代にピアノ三重奏に書き換えたのは、リストの弟子でヴァイマル楽長を後継したエドゥアルト・ラッセン(1830-94)でした。そしてこれに触発されたリストは、1880 年頃、ラッセンの楽譜に新たに導入楽句を加え、ラッセンの楽譜本体を手直しし、最後に、3 種類の終結部を書き残しました(Leslie Howard, 1996)。

全体は 2 部構成。ただし第 1 部(107 小節)のみの演奏も可である、と楽譜に記されています。第 2 部は主部(54 小節)と終結部(それ以降)からなり、終結部には 3 つの稿が存在します。終結部の第 1 稿はラッセンの楽譜をリストが少し手直したもので 3 つのうちで最も長大です[99 小節]。ついでリストはより簡潔な第 2 稿を書きます[28 小節]。そしてさらに、もっと簡潔で禁欲的とすら形容したい第 3 稿も書きました[11 小節]。「Tristia(哀しみ)」という題は最終段階で付けられました。

このように《オーベルマンの谷》ピアノ三重奏版では 4 つの演奏の仕方が可能です。「複数の稿」を併存させ、それぞれ意味をもたせて排除しない、そして稿の選択は演奏者にゆだねる——これは若いシューマンにもみられた提示方法で、近代的な作品のありようだといえましょう。な

おこの作品はリスト存命中には出版されませんでした。本日演奏される稿については、演奏者からお知らせいただきます。[リスト作品に付したS番号は音楽学者サールによるリスト作品番号です。]

リスト 歌曲《三人のジプシー》 *Drei Zigeuner* S.320

詩：ニコラウス・レーナウ *Nikolaus Lenau(1802 -50)*

訳：藤本一子

三人のジプシー(*ロマ)を一度、見た
一本の柳のそばで横になっていた
あれは私の荷車が
ようやく砂の荒地をぬけ出たとき

一人目はひたすらに
両の手にフィドル抱え
夕日に包まれ、燃えるように奏でていた
陽気な歌のしらべを

二人目はパイプをくわえ
自分の煙を眺めていた
嬉しそうに、まるでこの世で
ほかに幸せは要らないみたいに

そして三人目はいい気持で眠っていた
そして彼のツィンバロンは木に掛けられ
弦の上を風がとおり
心の上を夢が駆けた

彼らの服は三人とも
穴と色とりどりの継ぎはぎだらけ
だが彼らはお構いなく自由に
世の巧妙さを笑っていた

彼らは三つの姿でみせてくれた
人生が私たちを夜の闇に包むときも
こんな風に人は眠り、パイプをふかし、弦を奏で
人生をそれぞれ笑い飛ばすのだと

あのジプシーたちをこれからも
長い道で私は見るだろう
あの茶褐色の顔を
あの黒い縮れ髪を

(*) 文学の慣習にならって今回はジプシーと表記しました。

◇本日の使用楽譜 —————

- *Fryderyk Chopin. Utwory na fortepian i wiolonczelę [Works for piano and cello]; redakcja tomu, J.Ekier, P.Kamiński; Warszawa, Fundacja Wydania Narodowego : Polskie Wydawn.*
- *Sigismund Thalberg. Piano Trio in A Major, Op.69. Edition Silvertrust, USA, 2013.*
- *Ferenc Liszt. The complete music for violin and pianoforte : including the two pieces for violin and organ and the song with violin obbligato .ed.by Leslie Howard .Liszt Society publications .v. 12. Edinburgh : Hardie Press, 2010.*
- *Ferenc Liszt. The complete music for violoncello and pianoforte.ed. by Leslie Howard, with Steven Isserlis. Liszt Society publications .v. 10. Edinburgh: Hardie Press, 1992.*
- *Ferenc Liszt. The complete music for pianoforte, violin and violoncello.ed.by Leslie Howard .Liszt Society publications .v. 11..Edinburgh: Hardie Press, 1996.*

◇より関心のある人のために—————

- R. Allen Lott; From Paris to Peoria : how European piano virtuosos brought classical music to the American heartland. Oxford University Press, 2003. (ヨーロッパのピアノ・ヴィルトゥオーソは
いかにしてアメリカにクラシック音楽をもたらしたか)*
- Jonathan Kregor; Liszt as Transcriber. Cambridge University Press, 2010. (編曲者リスト).*
- Ernst Burger; Robert Schumann. Eine Lebenschronik in Bildern und Dokumenten. Schott, 1998. (シューマン. 画像とドキュメントによる生涯の記録). 画像を借用。*
- Robert Schumann. Gesammelte Schriften über Musik und Musiker. Leipzig : Georg Wigand's Verlag, 1854. (シューマンの評論集：音楽と音楽家)*

企画・レクチャー

■ 藤本一子（ふじもと・いつこ）音楽学

18・19世紀ドイツ、オーストリアの西洋音楽史、とくにR. シューマンを研究。国立音楽大学大学院修了。学位論文『ローベルト・シューマンの《ピアノ五重奏曲》Op. 44の成立史研究』により博士学位。主著に『シューマン』（大作曲家・人と作品 2008 音楽之友社）、共著に『モーツァルト事典』（1991 東京書籍）、『ベートーヴェン事典』（1999 同）、『ベートーヴェン全集』（全10巻 1999-2000 講談社）ほか。訳書に『イドメネオ』、『ドン・ジョヴァンニ』（1988 音楽之友社）、『ベートーヴェン 音楽と生涯』（ロックウッド著 2010 春秋社 共訳）など。2012年より「ロマン派音楽レクチャー・コンサート」主催。国立音楽大学ベートーヴェン研究部門所員を経て、2013年3月まで国立音楽大学・大学院教授。現在、東京藝術大学非常勤講師。

演奏

■ 奈良希愛（なら・きあい）ピアノ

シューマン国際音楽コンクールピアノ部門日本人初の第1位優勝、金メダル受賞。また数多くの国際コンクール上位入賞。2歳よりピアノをはじめ、全日本学生音楽コンクール全国第1位優勝。東京藝術大学卒業後、DAAD奨学生としてベルリン芸術大学を首席で卒業。文化庁芸術家在外研修員として同大学大学院国家演奏家コースを満場一致の最高点にて首席修了。マドリッド王立音楽院、ローマでも研鑽を積む。アメリカに渡り全額給費生としてマンハッタン音楽院大学院プロフェッショナルスタディ修了。在学中は室内楽科の助手も勤める。ドイツ国营放送局主催ヴァルトブルグ城演奏会をはじめ、世界の音楽祭から招待を受ける。国内外の数多くのオーケストラと共演。またNHK-BS“びあのピア”、KBSラジオ（韓国）などにも世界各地で出演している。現在ベルリンフィル、ドレスデン国立歌劇場等のメンバーと、ヨーロッパを中心に室内楽奏者としても活動中。アメリカ・マンハッタン音楽院を初め、韓国、日本、台湾にてマスターコースを行っている。また第18回浜松国際ピアノアカデミーでは中村紘子音楽監督の依頼をうけ、マスターコースを担当し、好評を博す。国際シューマン協会会員。現在ドイツと日本に在住し、国立音楽大学准教授。昭和音楽大学ピアノアートアカデミー講師。

■ 佐々木 崇（ささき・たかし）ピアノ

2000年東京藝術大学音楽学部入学。同大学院修士課程および後期博士課程を修了。学位論文「R.シューマンの初期のピアノ曲のモットー音型 — 象徴的核音型の回帰手法をめぐる—」により博士学位を取得。第3回日本演奏家コンクール大学の部第1位、第12回彩の国埼玉ピアノコンクールF部門銀賞、第6回東京音楽コンクールピアノ部門第3位、第6回国際シヨパン国際ピアノコンクール in Asia ファイナリスト、第1回高松国際ピアノコンクールセミファイナリスト。埼玉、都内を中心にリサイタルを開催。2012年からは川越市において毎年リサイタルを開くなど精力的に活動、2013年には函館公演も実現。これまでに、故真継豊子、赤間亜紀子、荻野千里、播本枝未子、迫昭嘉、大野真嗣、ディーナ・ヨッフエ各氏に師事。現在東京藝術大学ピアノ科非常勤講師、ヤングアーチストピアノアカデミー講師、こどものための大野ピアノメソッド講師。

■ 森山涼介（もりやま・りょうすけ）チェロ

愛知県豊田市生まれ。東京藝術大学を経て、同大学院修士課程を修了。東京藝術大学卒業時に同声会賞を受賞し、受賞者記念コンサートに出演。また在学中、藝大フィルハーモニアと共演。第8回ビバホール・チェロコンクール特別賞（井上賞）、原村室内楽セミナーにて「緑の風奨励賞」、「ハイドン賞」を受賞。「JT が育てるアンサンブルシリーズ」、「六花亭ホール・期待の若手シリーズ」等に出演。これまでに久保田顕、林良一、林俊昭、北本秀樹、山崎伸子の各氏に師事。現在、東京都交響楽団チェロ奏者。

■ 依田真宣（よだ・まさのぶ）ヴァイオリン

東京藝術大学卒業、同大学院修士課程を修了。在学中に「福島賞」「安宅賞」を受賞。国内の数多くの演奏会に出演している。「第4回東京音楽コンクール弦楽部門」第2位等、数々のコンクールで入賞を果たす。2010年度「青山音楽賞」（バロックザール賞）受賞。これまでに、ヴァイオリンを岡山潔、ジェラルド・プーレ、オレグ・クリサの各氏に師事。ソリストとして、仙台フィル、東京フィル、東響、藝大フィル等のオーケストラと協奏曲を共演。2011年には東京文化会館にてソロリサイタルを開催した。また2013年にはサントリーホールチェンバーミュージックガーデンのオープニングコンサートで、堤剛、クレール・デゼールの各氏とピアノ三重奏を共演し、好評を博した。これまでもサントリーホール室内楽アカデミー生として、竹澤恭子、マリオ・ブルネロの各氏と共演している。水戸室内管弦楽団に度々参加、紀尾井シンフォニエッタ東京2008-09年のシーズンメンバー。現在はゲストコンサートマスターとして大阪フィル、東京フィル、神奈川フィル、東響、群響、横浜シンフォニエッタ等に客演するなど、様々な分野で積極的に活動している。

■ 山本美樹子（やまもと・みきこ）ヴァイオリン

神戸市出身。兵庫県立西宮高等学校音楽科を経て、東京藝術大学卒業。卒業時に同声会賞を受賞し、推薦演奏会に出演。同大学大学院弦楽科修士課程 および室内楽科後期博士課程を最優秀の成績で修了。学位論文「ローベルト・シューマン《ヴァイオリンソナタ第3番イ短調》WoO2 作品論」にて博士学位を取得。第53回全日本学生音楽コンクール高校の部第1位。札幌六花亭ホール、大阪いずみホール、旧東京音楽学校奏楽堂にてリサイタルを行う。弦楽四重奏ではリゾナーレ室内楽セミナーにて「奨励賞」、「ハイドン賞」、最優秀賞の「緑の風音楽賞」を受賞。松尾学術振興財団から音楽助成奨学金を授与される。ヴァイオリンを木田雅子、田村知恵子、宋倫匡、ジェラルド・プーレ、岡山潔、松原勝也の各氏に師事。2013年より Quartett Humoreske としても活動。現在、東京藝術大学大学院室内楽科 ならびに お茶の水女子大学非常勤講師。

*本レクチャー・コンサートは品川区の複数の方々のヴォランティア協力をいただいております。感謝して記させていただきます。